浦和大学発 研究レポート

□10□

歴史と地域が交差する福祉史

大久保 秀子 副学長、こども学部 教授

研究者としての王道からは、まさしく懸け離れた道を歩いてきた。

史学科卒業後、修士課程で社会福祉を学び始めて40年以上、博士の学位取得から早くも17年になる。この間、恩師は折に触れて二つをご指導くださった。第一に生活者視点で広く社会福祉を捉えること、第二に社会福祉の歴史研究をすることである。

修士論文で、当時、先行研究もほとんどない在宅介護について訪問調査を行い、その後も歴史研究とは無縁の社会福祉調査に携わる機会を与えられた。地域社会の特質が歴史的に形成される過程で生活問題と社会福祉諸方策や諸活動のありようが特徴づけられている。漠然とした気付きが社会福祉の地域性と歴史性をつなぐ研究に対する関心へ収れんした。

そうするうちに浅草寺研究の機会に恵まれ、細々と「浅草寺社会事業」の歴史研究を書きためた。恩師は、歴史研究で学位論文にまとめるようにと、再び教え子の列に加えてくださった。生活者視点での社会福祉の学びを「地域社会の特質」に着目した歴史研究へと展開する道が開かれたのだった。

「浅草寺社会事業」は、明治末の関東大水害を機に浅草寺が開始した壮大な事業で、社会事業史（通常、大正期から昭和戦前期は社会事業を用いる）において評価される事項の宝庫である。その浅草寺社会事業の成立と展開について、地域社会の特質と歴史的背景を交差させて解明しようというのが研究の意図であった。

浅草寺は1400年に及ぶ民間信仰の拠点であり、近世には身分に関係なく自由に人々が集い、独自の経済、産業、教育、娯楽、生活文化、人間関係を包含して文化を生み出す「広場」であった。ロバート・フォーチュンは幕末の浅草寺を、重厚な寺院と隣り合わせにロンドンの下町をほうふつとさせるバザーのような店が立ち並ぶ（1863年）と記した。浅草寺社会事業に深く関与した大森公亮師は「ラビリンス（迷宮）」と表現した。Nam-LinHur は、秘仏との接触である「開帳」が「神秘的であるよりも陽気」（2000年）であることに驚いた。厳かな寺院と人々の日常が隣接しつつ形成された一大文化圏が、自治的ともいえる浅草寺社会事業を成立させ特徴づけていると結論した。

この研究に強く興味を示してくださったのは、意外にもドイツ社会事業史研究第一人者の教授だった。ドイツとの共通点が多いというご教示から、研究の方向性に新たな光が見えた。残念ながら現実に埋没し逃走中である。研究継続を諦めてはいないのだが。

さて、浦和大学教員の最後の回、大学自慢で幕を下ろしたい。本学の校訓は「実学に勤め徳を養う」である。人とつながり合い支え合う徳に裏打ちされた実学の学びを、あらゆる場面において発露させ、それを喜べる人間を地域に送り出すことが使命だと、私は創設者から教育の理想を教えられ、本学改組に次々と取り組んできた。卒業生が学びの泉を枯らさずに過ごしていることを願っている。

おおくぼ・ひでこ　専門は社会福祉学。長崎純心大学大学院人間文化研究科にて博士（学術・福祉）取得。『浅草寺社会事業』の歴史的展開―地域社会との関連で―』（ドメス出版）で第三回仏教社会福祉学会奨励賞。近著に『新・社会福祉とは何か　第四版』（中央法規）